様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１３４１１

研究課題名（和文）議会制の批判から擁護へ：モスカの現代的混合政体論の再検討

研究課題名（英文）From Criticism to Endorsement of Parliamentarism: Reexamining Mosca's Modern View of Mixed Constitution

研究代表者
千野　貴裕（Chino, Takahiro）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授

研究者番号：００７３２６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：現代において議会制民主主義の機能不全に対する批判が高まっている。だが、議会制に対する批判は今に始まったことではない。ファシズム台頭期のイタリアではこの批判は顕著にみられた。本研究は、20世紀前半のイタリアの思想家ガエターノ・モスカが、一時は同時代の議会批判と歩調を合わせつつも、ファシズム台頭の時代に議会制度を擁護するようになった理由を検討することを目的としてきた。本研究を通じて、モスカの態度変容は、ファシズムの台頭批判や自由主義の擁護だけでなく、古典的な統治のパラダイムである、混合政体論の現代的形態として議会をみなしたことが理由であるという新しい知見が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
私たちは議会制民主主義を当然のものと考える一方で、選挙や議会が十分な役割を果たしていないとの批判は世界的に高まっている。例えば、いわゆるポピュリズムがこうした既存の制度が等閑視していた人びとの意見を集約したとの見解がある。ファシズム台頭期のイタリアでは、既得権益の道具などとして、議会主義は厳しい批判にさらされていた。この時期に、当時のイタリアを代表する思想家であるガエターノ・モスカは、従前からの議会批判を撤回し、むしろ議会主義を擁護するようになった。本研究はこの理由を検討し、その結果は上記した通りである。本研究は、現代においても厳しい批判にさらされる議会の役割と可能性を見出すことに寄与する。

研究成果の概要（英文）：In contemporary times, there is a growing criticism of the dysfunctionality of parliamentary democracy. However, criticism towards the parliamentary system is not a recent phenomenon. In Italy during the rise of fascism, this criticism was particularly notable. This study aims to examine the reasons why the Italian thinker Gaetano Mosca, who initially aligned with contemporary criticism of parliamentary systems, came to defend the parliamentary system during the era of fascist ascent. Through this research, a new insight has been obtained, which suggests that Mosca's change in attitude stemmed not only from criticizing the rise of fascism and advocating for liberalism but also from perceiving the parliament as a contemporary form of the classical governance paradigm known as the theory of mixed government.

研究分野：政治思想史

キーワード：政治思想史　イタリア政治思想　モスカ　混合政体論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

１）ポピュリズムの台頭とその中心にある議会制民主主義批判

本研究を構想した時点では、英国の EU 離脱や米国のトランプ政権成立をめぐる一連の事態を念頭に、いわゆる「ポピュリズム」に関する議論が世界的に盛んであった。大まかに言って、ポピュリズムとされる現象においては、既存の議会制民主主義によっては掬い上げられないままに放置されてきた意見や不満が、強いリーダー像と直接に結びついて、大きな変革を志向するとされる（ミュラー 2017；水島 2016 など）。ポピュリズムの左派は、民主主義と自由主義が特殊な時代環境のなかで結びついたこととその限界を指摘し、代わりに、民衆の偶発的政治参加による正統性の調達を評価した（ラクラウ 2018 など）。こうしたポピュリズムによってとくに批判されているのは、多様化する利害を調整できない議会の機能不全である。

２）モスカ：なぜ議会主義の批判から擁護へと転換したか？

ポピュリズム台頭以前に、議会制への批判に対して応答を試みたユニークな人物が、本研究の取り上げたガエターノ・モスカ（1858-1941）であった。20 世紀前半には、ファシズムと共産主義という二大勢力が台頭する中で、多くの論者が議会制民主主義の「限界」を批判していた（宇野 2016）。例えばレーニンとシュミットは、議会制民主主義が社会の支配層であるブルジョワジーの経済的・社会的利害を議会内の「おしゃべり」で隠蔽するための道具だと批判し、むしろ独裁と民主主義が親和的であることを指摘した点で、その政治的立場の違いにも拘らず、一致している。

興味深いことに、モスカは、主著『政治学要綱』の第一版（1896 年）では、こうした議論と軌を一にする議会制批判を展開しているものの、その第二版（1923 年）では、多くの留保をつけながらも、議会制の擁護へと大きく立場を変えている。モスカが議会主義を擁護し始めたのは、ムッソリーニ政権が成立し、極端な選挙制度改革によって議会の多数がファシスト党によって掌握され、独裁を迎えようとしていた時期である。これほど議会が機能不全に陥りその批判がますます高まるなかでむしろ議会を擁護する方向に転換した点で、モスカの変容は興味深い。この転換を考えるうえでの研究代表者の仮説的見解は以下の通りであった。モスカは混合政体論に対する理論的理解を深め、議会をその現代的表現と考えるに至ったことで、議会を擁護するようになったと考えられた。この問題を検討することは、議会主義に対する不信と批判が強まる現代においても、現代のわれわれがもつ議会観の前提を振り返り、社会的均衡を維持する制度としての新しい議会観が剔出されるという意義をもつと考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は、上述した問題関心を踏まえて、モスカの議会主義に対する批判から擁護への態度変容の理由を考察することであり、その変容において彼が混合政体論への理論的考察を深めたとの仮説を検討することであった。混合政体論は、身分的・制度的均衡によって政体を安定的に維持する方法として、アリストテレス以来唱えられてきた理論であり 17 世紀までは政体を考えるうえでの主要なパラダイムであった。通説では、17 世紀の主権論の台頭によってその説明力は衰えたとされ、諸身分や諸勢力の均衡によってではなく、排他的な主権に基づいた政体の正当化が主流になっていった。しかしながら、モスカは、この古典的な混合政体論の現代的表現として議会を捉え、ファシズムをその逸脱として批判していた。

このように、本研究は、モスカによる混合政体論の刷新を通じた議会の正当化を検討すること

で、混合政体論の通説的理解を問い直すことと、現代における議会批判を再考し議会をなお擁護する論点（議会独自の役割）について考えるという二つの大きな目的をもって始まった。

３．研究の方法

このように興味深い論点がありつつも、モスカの政治理論に対する関心は、日本、英語圏、そしてイタリアのいずれにおいても低いままである。そこで、本研究は、まず基礎的な研究から始める必要があった。第一に、モスカがテキストを書いた政治的・思想史的文脈の精査が必要である。モスカの議論が詳細な政治制度に関する言及を含むため、同時代のイタリアの政治制度（選挙制度や議会制度など）に関する詳細な研究を行うことが必要と考えられた。また、同時代の思想家たちが、とくに第一次世界大戦後に政治的不安定が続いた時期、またファシズム政府の成立期において、議会をどのように評価しまた批判していたかを検討することは、モスカの議論の文脈を理解するために欠かせない。そのためには、幅広くイタリア政治史・思想史に関する一次史料やイタリア語二次文献を精査する必要があった。こうした政治的・思想史的文脈の理解を経なければ、モスカの議論を構成している前提を理解せずに、現代的観点や研究者の思い込みを彼のテキストに読み込んでしまう危険があるだろう。

この文脈的理解を踏まえて、第二に、本研究のテーマに関係する彼の主要なテキストを分析した。モスカは、ジャーナリスト、両院の議員、憲法学者、政治学者と多彩な経歴を持つため、その著作も多岐に渡る（例えばマフィア論など）。本研究は、網羅的かつ年代順にアプローチすることはせず、議会論に関連する主要著作をあらかじめピックアップした上で、検討を進めてきた。具体的には、『統治理論と議会的統治について』(1884)、「憲法の諸問題」(1885)、『政治学要綱』第一版(1896)、同第二版(1923)、『政治制度史・教説史講義』(1937)などが分析の主要な対象となる。これらの主要著作を分析する上で、必要に応じてその他の著作の分析を進めてきた。

第三の方法は、戦後アメリカのいわゆる「エリート民主主義」との比較をすることである。先行研究においては、モスカとシュンペーターら戦後アメリカのエリート民主主義者たちは同一線上で扱われてきた（Bachrach 1969; Lowell 1980 など）。シュンペーターは、選挙によって代議士を選び出すところに大衆の政治への関わりを限定した上で、代議制民主主義の要諦をエリート間の競合と交代として位置付けた。こうしたエリートの交代としての民主主義理解は、いかなる社会にあっても少数の政治階級が多数の被統治者を統治するとした、モスカの政治階級論にたしかに酷似しており、両者は実際無関係ではない（両者をつなぐ「ミッシング・リンク」の研究もいくつか出てきている）。だが、モスカにあって、シュンペーターらには継承されなかった重要な議論がいくつかあると考えられる。この点が、モスカにあって混合政体論を擁護し、シュンペーターらがそれを取らなかった理由であろうと考えられた。

４．研究成果

本研究によって、得られた知見を簡潔に述べるならば、上記の仮説はかなりの程度正鵠を得ていたということである。モスカの著作を詳細に検討すると、議会主義の擁護の文脈で混合政体論への言及がしばしばみられるものの、この点はいままで十分に指摘されてこなかったことがわかった。また、この点は、本研究の狭義の目的を超えて、より広い意味で、政治思想の一般的視角に照らすと有意義な知見が得られるだろうと考えられる。というのも、自由主義と民主主義の歴史的結びつきを通じて、現代の自由民主主義、つまり立憲主義と議会主義をもつ民主主義の体制が可能となったと一般的には叙述される。しかしモスカの事例は、自由主義に遥かに先立つ混合政体論の観点から議会主義が正当化されていたことを示しているからである。少なくとも言

えることは、現代の自由民主体制もまた、さまざまな歴史的成り立ちをもっているということである。また、とりわけイタリアの文脈においては、主権論の台頭後も混合政体論に一定の位置づけが与えられてきたのではないかと思われた。この点は、さらに時代を遡った研究が必要である。

本研究の具体的な研究成果は以下の通りである。

（英語主要誌査読付き論文）

“The Modern State and Future Society: Gramsci’s Two Conceptions of the “Ethical State””, The European Legacy 27(2), pp. 125-142, 2022年.

（日本語論文）

「グラムシアン・モーメント：グラムシにおけるヘゲモニーと市民社会を再考する」

『思想』1165号(2021年5月号), 80-102頁, 2021年.

（日本語訳書）

『哲学がわかる　シティズンシップ』リチャード・ベラミー著、千野貴裕・大庭大訳、岩波書店、2023年（「訳者解説」の執筆を含む）.

上記のほかに、本研究による英語論文を二本執筆することができた。1本は現時点で査読中であり、もう1本は主要誌に投稿したところ査読を通過しなかったため、修正のうえ、他の雑誌への再投稿を検討中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Chino Takahiro	４．巻 27
２．論文標題 The Modern State and Future Society: Gramsci’s Two Conceptions of the “Ethical State”	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The European Legacy	６．最初と最後の頁 125～142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/10848770.2021.2001888	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 千野貴裕	４．巻 1165
２．論文標題 グラムシアン・モーメント：グラムシにおけるヘゲモニーと市民社会を再考する	５．発行年 2021年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 80-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 リチャード・ベラミー、千野 貴裕、大庭 大	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 200
３．書名 哲学がわかる シティズンシップ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関